

港(その3) 長洲港

金魚の町で有名な、長洲町の突端にあるこの静かな漁港は、昭和33年有明フェリー(有明海自動車航送船組合)が就航してにわかには活気づいてきた。有明フェリーは熊本県と長崎県の共同事業で有明海の最短距離である長崎県の多比良港と熊本県の長洲港との間を自動車航送船を運航するものだが、産業路線としての重要さはもちろん、九州国際観光S字ルートの要所としての意義もきわめて高い。現在、クリーム色の三隻の有明丸が青い潮路を行きまわっている。



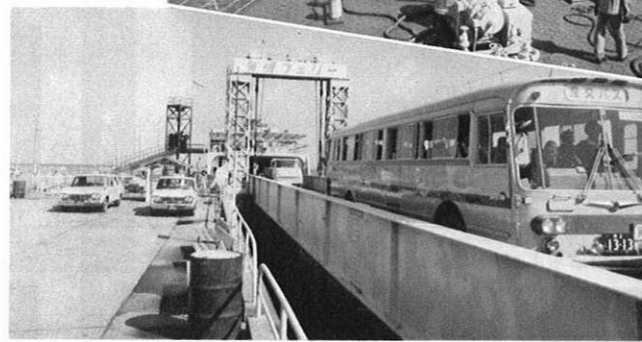
上・有明フェリー長洲事務所の全景



右・いよいよ港に接岸。船のへさが開きトラックやバスが吐き出されるしくみになっている。



左・船から直接棧橋を渡って上陸する観光バスやマイカーの列



上・観光客の利用もぐっとふえてきた。



左・有明海の沖で、フェリーが離合する時、船客たちは思わず互いに手を振り合う

明治二十年代から三十年代にわたる日本の歴史——それはまた熊本の歴史とも切りはなせない——から、日清戦争(二十七年、八年戦役)と日露戦争(三十七、八年戦役)を逸することはできない。この二つの戦争が、東洋の一島国日本を、世界の舞台へ押し出した跳躍台の役目を果たしたことは否めないからである。

同時にわが熊本の第六師団は、この両戦役によって精鋭無比の名声を博し、後年「日本一の六師団」という定評を生む足場をつくった。昭和期に入って満洲事変、支那事変、大東亜戦争と、スケールが拡大するにつれて、この郷土師団の勇名も逐次エスカレートした形である。こうした実績から、明治・大正・昭和にかけて、熊本には、軍都という異名が冠せられた。かつて、学都の名があったようにある。学都の名は五高華やかなりし時代までで、福岡に九大が生まれるとその影はうすれたが、軍都の名は大東亜戦争の終焉までその生命を持続した。熊本城とともに、兵隊さんは熊本の象徴だったわけである。これはよかれあしかれ熊本にとって歴然たる事実であり、熊本の

百年史から抹殺することはできない。わが国の女性解放史に重要な役割を果たしている一人は、本県益城町出身の矢島楯子で、彼女は明治十九年東京婦人矯風会(後日本キリスト教婦人矯風会)を創立して、婦人の地位向上と廢娼その他の社会事業に挺身し、九十三の高齢で歿するまで意欲的な活動を続けたこと知られる。

無敵師団・女性解放?

くまもとの明治百年

(最終回)

山口 白陽

(郷土雑誌「呼ぶ」主宰)

われる流行歌が原拠になっている。唄の文句はいろいろあるが、中でも「祇園山から二本木見れば倒るる何となく」(きんぎょやま)しよ、金は無かしま(中島)家も質(茂七)東雲のストライキさりとはい辛いな、てなことおっしゃいましたかねという替唄によって、当時数十名の娼婦が東雲楼から集団脱走し、祇園山(花園山)に立てこもって氣勢をあげた、とい

われる流行歌が原拠になっている。唄の文句はいろいろあるが、中でも「祇園山から二本木見れば倒るる何となく」(きんぎょやま)しよ、金は無かしま(中島)家も質(茂七)東雲のストライキさりとはい辛いな、てなことおっしゃいましたかねという替唄によって、当時数十名の娼婦が東雲楼から集団脱走し、祇園山(花園山)に立てこもって氣勢をあげた、とい

「くまもとの明治百年」は本稿をもって、最終回としました。前回の特別号「熊本の百年」写真集とあわせてご利用いただければと思います。なお、「熊本の百年」の略年表の中で明治二十七年の項が活字もれしていました。明治二十六年の中の「八八・一V清国に宣戦布告」以降は、明治二十七年の事項として行かえになりますので、そのようにご訂正ください。